

高齢期における主観年齢に関する質的研究

吉田 菜穂

現代の日本において、高齢化社会との付き合い方の模索を避けて通ることはできない。平均寿命が延伸し、それに伴って健康寿命の延伸が望まれる中で、各個人が「高齢期」として過ごす時間は長くなっていくといえる。そのため、いずれ誰しもが迎える「老い」と、いかにして付き合っていくかが重要となる。そして、その「老い」とは個人にとってどういったものであるのか、「老い」に伴って個人の自己概念はどのように変わっていくのかを明らかにすることが必要と考えられる。特に高齢者は自己若年視傾向というものが存在し、自身の主観年齢を若く評価しがちである。しかし、自己若年視が起こる背景は未だ明らかにされてはいない。さらに、主観とは、その時々によって自身に対する評価も変わっていくものであるため、高齢者の主観年齢は固定的なものではないと考えられる。

そこで本研究では、主観年齢を決定する要因を探り、その内実が実際の個人の実情に沿ったものとなりうる要因として質的に検討することを目的とした。そのため、8名の高齢者を対象にフォーカス・グループ・インタビューを行った。

分析の結果、「見た目による評価」「張り合いのある生活」「若さの希求」「有能感の自覚」「健康状態による年齢の実感」「現状の受容」という6つのカテゴリーが抽出された。

この結果から、主観年齢を若く捉える要因と、高く捉える要因が分かった。そして、主観年齢は固定的なものではなく、様々な環境要因から、自身をある時はポジティブ、またある時はネガティブに評価することで、常に自己概念の揺らぎの中で流動的に捉え続けていることが分かった。その一方で、そうした若さや健康状態にとらわれることなく、より高度な精神状態で自己を確立している老年的超越の傾向も見られた。主観年齢の決定に関する個人内でのプロセスを高齢期の「揺らぎ」として捉え、個人内の因果性や関連性が明らかになったことは、本研究における意義である。

本研究においては、8名に対してのみ行った調査であり、今後調査対象者を増やすことによって、より多様な意見を収集することが可能となる。また、自己概念と主観年齢の関わりを、質的・量的にアプローチしていくことで、より詳細に個人内における主観年齢の決定要因とその因果性が明らかになると考えられる。それに加えて、老年的超越の視点が見いだされたことから、今後、縦断的研究を行うことで、長期的スパンで見た主観年齢の捉え方の変化を検討していくことが望まれる。(臨床死生学・老年行動学)